

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ソウハチ

学名 *Hippoglossoides pinetorum*

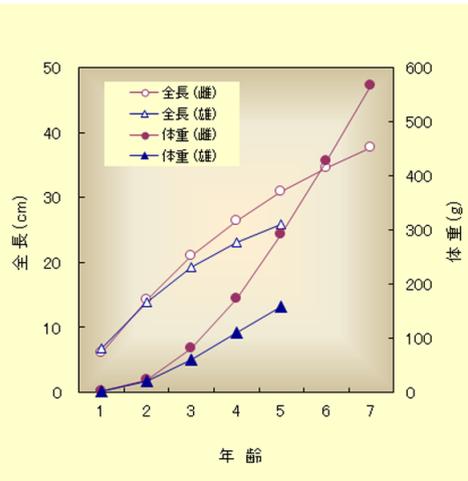
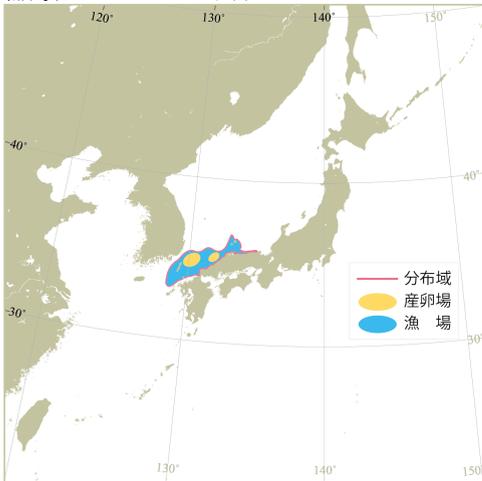
系群名 日本海系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 雄5歳以上、雌7歳以上
 成熟開始年齢： 雄2歳、雌3歳
 産卵期・産卵場： 1～4月、対馬周辺海域、隠岐周辺海域
 食性： エビジャコ類、オキアミ類、全長15cm以上ではキュウリエソなどの魚類、20cm以上ではホタルイカ等のイカ類
 捕食者： 不明

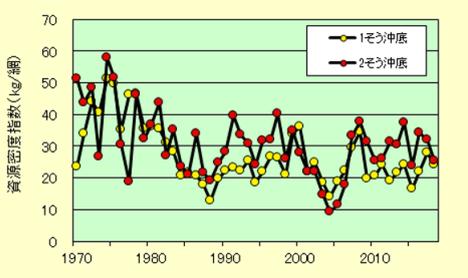
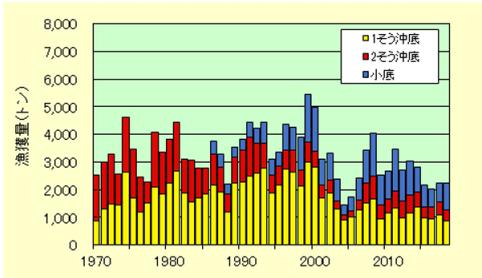


漁業の特徴

本系群は日本海西部海域において1そうびき(1そう)および2そうびき(2そう) 沖合底びき網(沖底)と小型底びき網(小底)によって漁獲される。総漁獲量に対して、1990年代前半までは沖底の漁獲量が80～90%を占めていたが、1990年代後半以降は小底の割合が増加し、30%以上の水準で推移している。沖底では2そうより1そうの漁獲量が多く、近年におけるそれぞれの漁獲量の比率は平均して3:1程度である。

漁獲の動向

漁獲量は1999年に5,000トンを超え最高値となったが、2004年には最低値の1,400トンまで減少した。2008年には4,000トンに増加し、以降の漁獲量は2,000～3,000トンの範囲で推移し、2018年は2,200トンであった。資源密度指数は1そう、2そう沖底ともに1970年代に最高値となった後は減少傾向が続き、2004年に最低値となった。その後2008年まで増加したが、以後、増減を繰り返している。



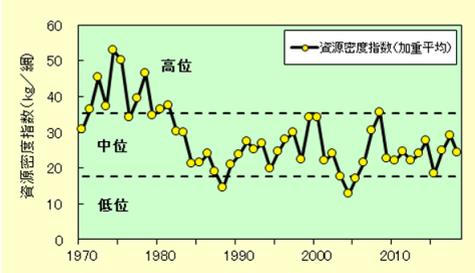
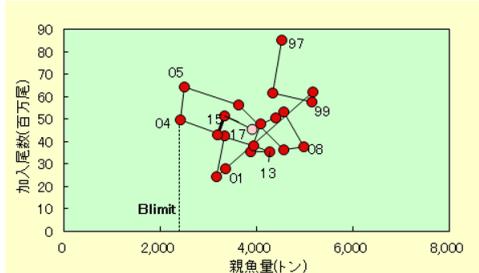
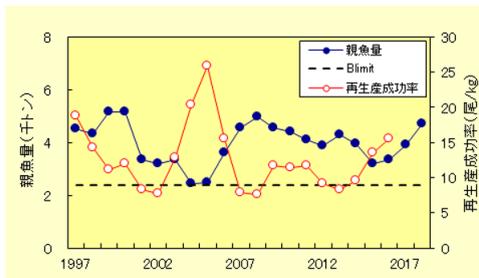
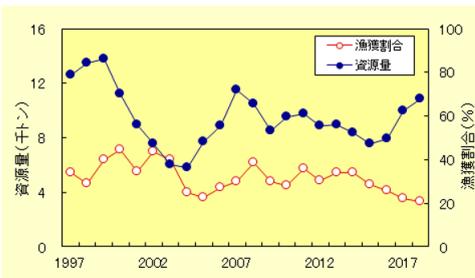
資源評価法

本系群では沖底の資源密度指数を考慮したコホート解析により資源量を推定した。年齢別漁獲尾数は鳥取県・島根県の銘柄別体長組成・漁獲量と、沖底・小底の漁獲統計情報を用いて求めた。資源水準は沖底の資源密度指数、資源動向は最近5年間の資源量の推移に基づきそれぞれ判断した。

資源状態

資源量は1999年に過去最高の1.38万トンとなり、2004年には最低の5,800トンまで減少した。その後増減が続いたが、2016年に増加に転じ、2018年は1.08万トンとなった。親魚量の推移は資源量と概ね同調しており、2018年の親魚量は4,700トンであった。本系群の漁獲係数(F値)は低い水準で推移しており、再生産成功率も安定している。Blimitは過去最低親魚量から資源が回復した2004年の親魚量2,400トンに設定した。2018年の親魚量はBlimitを上回っている。水準は沖底1そう・2そうの漁獲比率(3:1)で加重平均を取った資源密度指数の最高値と0を3等分して高位、中位、低位とし、2018年は中位と判断した。動向は直近5年間(2014～2018年)の資源量の推移から増加と判断した。





管理方策

本系群のF値は低く、再生産成功率も安定しているほか、2018年の親魚量もBlimitを上回っていることから、中長期的に親魚量を維持していくことが重要であると考えられる。親魚量の維持を管理目標とし、管理基準値としてFmedにより2020年ABCを算出した。Fmedは資源計算を行った過去20年間(1997～2016年)の再生産成功率の中央値(RPSmed)に対応する3歳のFを探索した。2018年の漁獲係数(Fcurrent:0.33)はFmed(0.49)よりも低いため、現状の漁獲を続けた場合、資源量・親魚量ともに増加し、その後横ばいになることが予想された。

管理基準	Target/Limit	2020年ABC (百トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの増減%)
Fmed	Target	34	28	0.39 (+19%)
	Limit	41	33	0.49 (+48%)

- 本系群のABC算定には規則1-1-(1)を用いた
- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルのF値(漁獲計数)による漁獲量、Targetは、資源変動の可能性や誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の維持が期待されるF値による漁獲量
- Ftarget = Flimit × αとし、係数αには標準値0.8を用いた
- 現状のF値(Fcurrent)は2016～2018年のFの平均値であり、0.33である
- 2019年以降の加入量は1997～2017年の加入量の平均値と仮定した
- 漁獲割合は2020年の漁獲量/資源量
- F値は各年齢の平均値

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は増加
- 2018年の資源量は1.08万トン、親魚量は4,700トン
- Blimitは過去最低親魚量から資源が回復した2004年の親魚量2,400トン、2018年の親魚量はBlimitを上回っている

管理方策のまとめ

- 本系群のF値は低く、再生産成功率も安定しているほか、2018年の親魚量もBlimitを上回っていることから、中長期的に親魚量を維持していくことが重要
- 親魚量の維持を管理目標とし、Fmedを管理基準値として2020年ABCを算定した

執筆者: 吉川 茜・飯田真也・八木佑太・藤原邦浩・上田祐司

資源評価は毎年更新されます。